

# 閉じた世界と開かれた世界

## ——哲学の根本問題——

萩 原 樂

### 目 次

- 第I章 見えるものと見えないもの
- 第II章 閉じた世界と開かれた世界

どの学問にも、その学問を成立させる、そして、最終的には、その学問の命題の正しさが、広い意味で、そこで実証されるような、「対象領域」あるいは「対象世界」というものがある。いかに抽象的な議論をしていても、その領域が存在しないならその議論が出てこないような世界である。ときには、学問の内容の方が、優先し、ほとんど独立して、学問自体として、それだけで成り立っているように見えたりすることもあるが、そしてそれが、真理一般と結びついて、その学問を成立させた基本的な領域の方が忘れられたかの様相を示すことがあるが、やはりその領域の存在が、学の出発点であり、根拠なのである。例えば、歴史学は、人類の歴史の存在を前提とする。社会学は、社会の存在しないところには、成立の動機があり得ないのである。哲学にも、そのような意味で、哲学を成立させた、基本的基盤というものがあるはずである。そして、哲学の有効性も、その基盤と何らかの意味で照らし合わせて、決まる。哲学といえども宙に浮いたところで成り立っている学問ではないのである。

それでは、哲学の成立基盤は何か。ひとによって、それぞれ、いろいろな領域を成立基盤として、哲学を始めているというのが、また哲学

の特徴かもしれないが、ひとのことはさておき、私は、それは、現に私たちが生活しているそのこと、その世界であるとしたい。あるいは、通常の理解と違うかも知れないが、何ととっても、哲学は、日常、目の前の、ありふれた生活のところから出発し、そこに戻るものである。それはある場合は、「生活世界」(Husserl)とよばれ、「ザラザラした大地」(Wittgenstein, 『探究』§107)などとも喩えられたりする。やはり、その意味で、哲学は、究極的には、人生の問題であり、生き方の問題なのである。

そういった観点に立って、この小論では、私たちの生活しているこの世界がどのような構造をもち、どのようなあり方をするものなのか、この二点を見てみたい。

### 第I章 見えるものと見えないもの

この小論で、私たちは、日常の生活しているところから出発して、哲学を始めたいとした。それは目の前の、今ここにいる、平凡な日常の世界である。そこで、まず、そういった日常世界は、ごく単純に考えて、どのような構造のものか、みたい。

私たちが、今、ここに、坐っていたり、立っていたりする、そのことと、その廻りの世界を眺めてみる。イスがあったり、机があったり、床があり、壁があり、他人であるAさんがいたり、そして私が入りたりする。私たちは、それら一つ一つを、他と区別された、独立したものと認め、その区別された一つ一つと関係を持ち、

それらを単位に、全体の中でそれらに反応して生きている。ここで、これらの、単位として、区別された、一つ一つを、「個物」と名づける。とりあえず、私たちの世界は、個物の集まりであることになる。

ところで、個物が、そこに成立している、あるいは個物がそのように個物として認められるについては、実は、条件、要因がある。例えば、現代科学の知見を受け入れるならば、この世界は、振動する素粒子の全体である。それ故、ここに複数のイスがあったとして、素粒子の立場からは、右にあるイスと、左のイスは、ともにイスとしてではなく、互いに無関係な、異なった、膨大な数の素粒子の組合せであるのみで、そこには、イスも机も、私たちも見えてこない。しかし、実際、日常生活では、そこに存在するのは、見えているのは、このイスであり、この机であり、私たちなのである。そういった私たちの生活において存在するとされる物々、それらの見え、区別が、どのようにして成立しているのかである。先走って、結論を言うと、このイスとあのイスを、イスとして成立させるには、イスという「概念」が必要である。イスの概念、イスそのものを、私たちは承知して、初めて、複数のイスを、イスとして認めうる。このことは、概念の本質、成立、実体が何であるかはさておいて、概念イスなしで、どのようにしてこのイス、あのイスが成り立ちうるかを考えれば、分かることである。概念イスなしには、目の前のイスは、例えば、素粒子の組合せに過ぎず、イスではないのである。

概念、例えば、概念イスは、次の特質をもつ。

① 直接、目に見えないこと。

このイス、あのイスは目に見える。しかし、イスそのものは見えない。

② すべてに（無限個のものも含めて）必ず関係している（現われる）こと。

このイス、あのイス、将来現われるであろうイスまで含めて、すべてイスなのである。

③ 具体的イス（個物イス）が消滅しても、消えてなくなることはない。

このイス、あのイスは、燃やしてしまえば、存在としてはなくなる。しかし、概念イスは、いわば永遠である。もともと実在性をもたないからである。

こういった性質をもつものを、個物に対して、「普遍」とよぶことにする。概念は普遍のひとつである。

そうすると、先には、私たちの生活しているこの世界は、個物の集まり、組合せであると言ったが、ここでは、目に見える個物に加えて、目に見えない概念をも含めた全体である、となる。その個物の集まり方、構成、組合せはいろいろありうる。

ところで、次に、この個物は変化する。木製のこのイスは朽ちる。そして、個物の組合せも変化する。今、Aさんがこのイスに坐っていた。次に、Bさんが坐る。これはイスとAさん、次には、イスとBさんという、組合せの変化である。

実は、変化が成立する、変化が認められるについては、個物の成立に概念が必要であったように、そこに、経過一般、あるいは法則が必要である。もし、そういうものがなかったならば、ここにあったイスと、朽ちたイスは、何の関係もない別々なことがらであり、2つのことがらが、2つのものとして、偶然にそこにあったに過ぎない。それにつながりを与えて、それを同じものの変化であると認めさせるのは、経過、法則が先にあって、両者がその経過、法則のいうところに合致しているからである。法則「木は（水に浸すと）朽ちるものである」があって、このイスと朽ちたイスは結びつく。

このことは、個物の組合せの変化についても、同じである。例えば、A君が今教室にいる。この状況は、A君と教室の組合せである。次に、A君は食堂に行く。状況は、A君と食堂の組合せに変わる。もし、そこに、学生生活の一日における経過という認識、視点がなければ、それは2つの状況が別々にあるだけで、変化になら

ない。ついでに言えば、近代科学は、個物の変化を、それを構成する構成要素（例えば、原子、分子）の組合せの変化として説明する。その意味では、すべては組合せの変化で、そこでは、個物自体は変化しないことになっている。

経過、法則も、概念と同じに、普遍のひとつである。

そこで、私たちの生活している世界は、次のものの全体であることになる。

- ① 個物
- ② 個物の組合せ
- ③ 個物の変化
- ④ 個物の組合せの変化
- ⑤ 概念
- ⑥ 法則

この中で、①～④は、私たちの生活している世界の中で、いわば目に見えるものである。ここで、目に見えるとは、広く、装置を使って確認できることまで含めて考えることにする。もっときちんと言えば、実在性（存在性）をもつということである。実在性を認められるものは、何らかの意味で見えるものである。これが、ここでの、実在性、あるいは目に見えることの定義である。一方、⑤と⑥は目に見えない。その意味で、実在性をもたない。それ故に消滅がない。

個物とは何かに関連して、個物は、ある場合は、視点を変えることによって、また別な個物の組合せとして、説明される。例えば、このイスは、木片と鉄釘の組合せであり、炭素の分子と鉄の分子の組合せであり、あるいは素粒子の組合せである。こういった説明がなされたときは、前の説明された個物は個物でないことになる。それぞれの説明において、何を個物とするかは、そのときの状況により、任意である。そして、その任意さは、実在に（存在に）行きついたところで、何かを実在としたところで止まる。何かが個物とされるとは、その外はすぐに実在であるということである。この意味で個物は出発点である。

以上を踏まえて、個物は次の特徴をもつ。

- ① 広い意味で目に見える（実在性）
- ② 消滅する（実在であるから）
- ③ そこから出発するところのものである（実在に隣り合わせ）
- ④ 個数として有限である（実在であるから）

④は有限性の定義でもある。実際に存在することをもって、有限とするのである。このように、個物は、存在、実在ということがらに、密接に関係しており、個物の特性は存在、実在の特性でもある。

一方、普遍は階層性をもつ。概念について、こちらに概念イスがあり、こちらに概念机があったとする。これらは、今は無関係なバラバラなものであるが、家具とまとめられて、あるいは、家具という新しい概念の成立によって、新しい意味を持つ。そこに新しい世界が出現する。概念家具はイス、机を、家具として成立させる、その意味で、一段上位の概念といえる。ここに階層性を見るのである。さらに家具はまた道具であり、資産であるとして、階層性は上に伸びていく。個物の組合せである、Aさんがイスに坐っているについても、坐るは走るその他と共に、人の振るまいであり、また生活活動のひとつである。もうひとつの普遍である法則についても、朽ちるは酸化であり、さらに化学変化であり、そこに階層がある。個物の組合せの変化についても、[教室→食堂]は移動であり、学生生活の経過であり、適応行動である。つまり、  
イス→家具→資産→  
坐る→振るまい→行動→  
朽ちる→酸化→化学変化→  
移動→学生生活の経過→適応行動→  
という上に開かれた階層が普遍には成立するのである。

そこで、改めて、普遍の特性をみておくと、

- ① 目に見えない（実在性を欠く）
- ② 消滅がない・永遠（実在でないから）
- ③ 上に開いた階層性をもつ
- ④ 無限個の場合を含めて、すべてに関係する（無限性）

このようにして、私たちの生活している世界は、「個物と個物の変化」と「普遍」、つまり、見えるものと見えないものの合わさった全体である。どちらか一方を抜いても、私たちの生活しているこの世界の説明としては不十分になる。それぞれの由来と特性がどうであれ、現実には、私たちは、どちらが優先するということなく、この両者の中で、両者の平等な影響下に生活をしているのである。生活の中では、私たちにとって、見えるものも、見えないものも、対等である。それを区別してとらえているとすれば、私たちは特別な視点のもとに立たされているということである。

その上で、しかしながら、個物は目に見えるから、分かりやすい。とりあえず、分かっているということになる。一方、普遍はすぐには理解し難い、したがって、それを理解するには、説明が必要になる。それ故、普遍の身分をどのようなものと説明するかは、私たちの生活している世界が何であるかに関係して、哲学の重要問題になるのである。次にそのことについて論じたい。

その前に、ここまで述べてきたことを、次の図1にまとめておく。矢印の長さが、実際に私たちが生きている生活世界である。その始点と終点をどこに置くかは、それぞれの場合による。

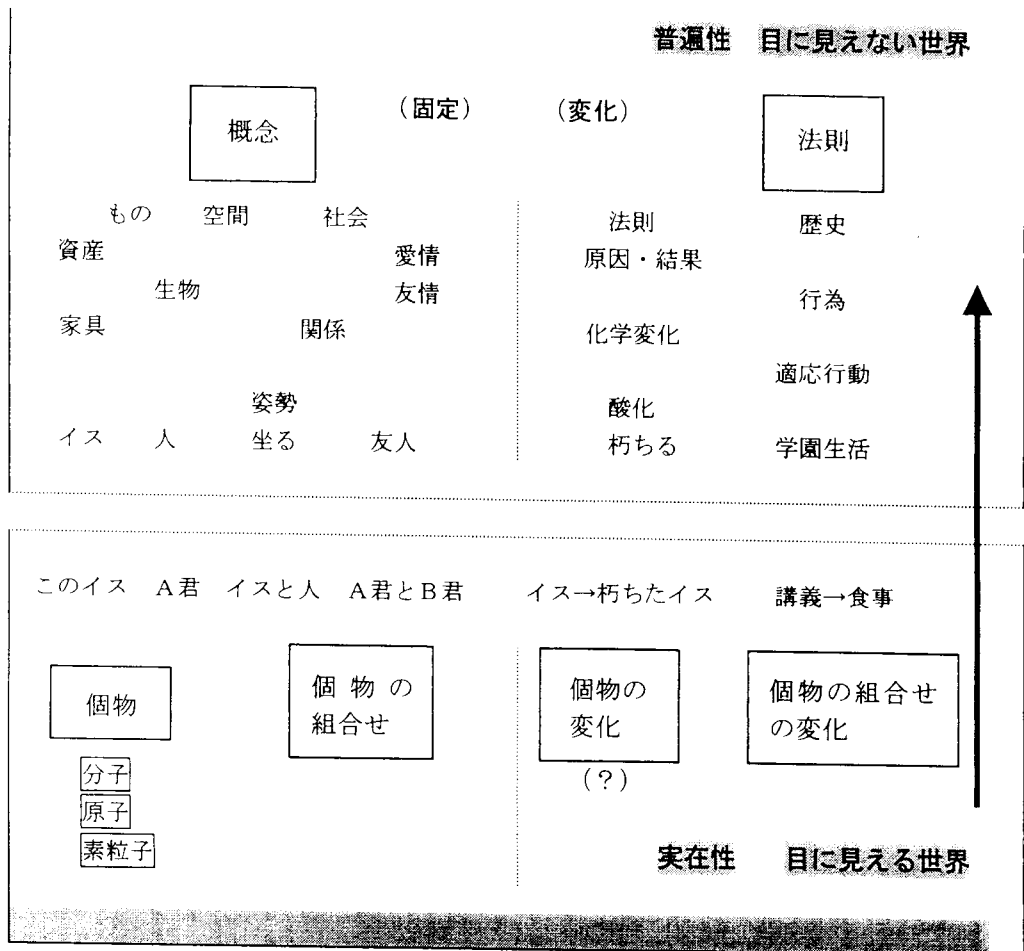


図1

## 第Ⅱ章 閉じた世界と開かれた世界

ことがらを人に納得させるのに、あるいは、自分も納得するのに、2つの方式がある。

ひとつは、そのことがらの前に、それに先立つ、別なことがらを置き、それに基づいて、あるいはそれに結びつけることによって、そのことがらの説明とする（あるいは根拠づける）、そして、それによって、ことがらを納得したとする、こういった場合である。これを、先立つものの存在を前提とすることから、「アプリアリズム」とよぶことにする。例えば、目の前に木材の組合せとしてのこのイスが与えられているとき、それをイスであるとして、つまり、事前にある概念イスと結びつけて納得する。あるいは、車内で老人に席を譲るといふ単なる脚の筋肉の動きを、親切であるとして、一般に親切とよばれていることがらと結びつけて承知する、そういうことである。これは説明とよばれることの、標準的なやり方である。ついでに言えば、存在性というようなことは、この方式でいう、先立つ別なことがらの、典型的なものである。目の前のことがらの後ろに、その存在性を置いて、そこに達したことによって、そのことがらに関して、私たちは納得するのである。

これに対して、先立つ別のことがらの存在を要求せずに、納得する立場もある。これは、ある意味で、説明ということの排除である。これを「アポステリアリズム」とよぶ。例えば、このやり方では、目の前にイスがある、それで終りである。それ以上の追求はない。したがって、それが存在であろうとなかろうと同等である。説明自体を排するから、存在性はここでは特別な意味をもってこない。また、このイスは概念イスと結びつかない。ことがらは、そこにそのままあり、坐るものがある、それだけであって、それはイス（概念）でも何でもないのである。それ以上追わない、そこで納得するのである。

ちなみに、納得とは、アプリアリズムに従えば、確実性に、真理の岩盤に、達したことであ

り、アポステリアリズムに従えば、今、そこに疑問が生じないというだけのことである。

概念や、法則が、ことがらやことがらの変化に先立って、存在するものであり、それによって、ことがらやことがらの変化が生ずる、つまり、普遍である概念や法則は実在するとするのは、普遍のアプリアリズムによる説明である。普遍が存在（実在）することによって、普遍の説明は完了し、そこで納得することになる。概念について、プラトンのイデア論はこの立場である。イデアは実在する普遍（概念）である。またアリストテレスに由来して、ことがらの中に本質をみるという説明の仕方があるが、その場合、本質は、ことがらに先だって存在しているものである。事前に存在する本質が個物に実現しているとされるのである。法則について、近代科学は、法則は自然界にあらかじめ存在しているとする。だから、法則は発見されるべきものであり、現象の変化は法則と結びついて、法則の現われとして、説明される。

普遍をアポステリアリズムによって、説明するとどうなるか。

まず、普遍のひとつである概念について、典型的なのは、唯名論によるそれである。そこでは、概念は実在せず、概念は、個物の集合への名前に過ぎないことになる。あるのは個物の集合だけである。事前に概念という規定性がない以上、集合は、すべての集合の可能性においてあり、それらは互いに対等である。概念はそれらの内からひとつの名前として、後から生じる。それ故、実在をバックとせず、その意味で任意であることになる。仏教の議論からひとつ例を出せば、部派仏教の中で、有部では、個物も普遍も区別せずに、この世界を構成する要素を法といい、法は実在するという。これに対して、大乘仏教の中観派は、法は無自性であると主張する。自性とは、固有の性質、自己存在性、あるいは他に依存しないでそれ自体で存在することを指す。龍樹は『中論』で、法に自性を認めると、矛盾が生ずる、それ故、法は無自性である、と説く。法はある、しかし無自性としてあ

る。自性を欠いてもそこにあるということは、言いなおせば、後から作られたものとしてということである。作られたものには経過がある(縁起)。アポステリオリズムによる説明とは、言いなおせば、そのものが作られたものであること、そしてその具体的過程の提示であるといってもよい。

個物あるいは個物の組合せの変化が成立するために要請される普遍について、その例として法則をあげたが、法則も含めて、変化の裏にあるのは、もっと一般的には、変化を变化として認めさせるものとしての何らかの規定的なものといってよい。その根幹にあるのは、すべてがそれに従っているという、規則性である。それは自然現象については法則であり、人間の行動については、それをさせる外的には基準、内的には意思のごときものである。この種の普遍に対するアポステリオリズムによる説明として、まず行動主義がある。行動主義によれば、私たちの行動を事前に規制するとされる、例えば意思など、心的なものについて、私たちの行動は事前に存在する意思など心的なものによって導かれるのではなく、そこにあるのは、前の状態(例えば刺激)と後の状態(例えば反応)の組合せだけで、心は事前なる実体としては存在しない、心とは、意思とは、この結びつきそのもののことである、こうなる。そこには、事前なるものとしての心、意思は存在しない。

また、ウィットゲンシュタインは、一般に規則というものについて、「規則はいかなる行為の仕方でも決定できない、なぜなら、どのような行為の仕方でもその規則と一致させることが出来るから」(『探究』§201)、「私は規則に盲目的に従う」(『探究』§219)と言う。なぜなら、私が現にある特定の規則に従っていることを確認させるような、私に関する(内的な)事実はどこにも発見できないこと、自分が現に行っているその規則への従い方が、その規則への正しい従い方であることの正当化ができないからである。行動の前の基準、現象の前の法則、これらはともに、広い意味でそのことがらを規定する

規則と言ってよいだろうが、規則はことがらに対して、事前なるものとしては全く影響力をもたないというのである。したがって、変化、行動について、そこには、変化、行動がただあるだけ。法則、目的、動機は事前に存在するものではない。あるとすれば、結果として、私たちがそれを受け入れたように見えるというに過ぎないことになる。

このようにして、普遍に、事前なる存在性を認めないのが、したがって、普遍は作られたものであるとするのが、アポステリオリズムによる説明であることになる。

一方、個物は存在によって裏付けられて個物であったから、アプリオリズムと結びつくものである。個物について、アポステリオリズムによる説明はありうるのだろうか。前章の説明によれば、個物を個物たらしめるのは、事前なるその実在性であった。アポステリオリズムがアプリオリズムの否定として存在性の否定に向かうものだとすると、そこで、まず、個物の実在性を否定する論を見てみたい。

アプリオリズムにしたがって個物に実在性を認めることによって、個物は孤立、独立したものとなる。つまり、個物一つ一つが確認できるものであることになる。一方、通常、この確認は、観察によって、なされるとされる。そのためには、観察もまた、独立した、それ自体で、成立できる出来事でなければならない。その意味で、実在性と観察可能性は裏腹であり、互いに他を保証し合うものであった。

これに対して、個物の文脈性という視点が出てきた。個物は概念と関連して個物となる。概念は、階層性と絡んで、実際には他の概念とのネットワークの中にある。概念のネットワークとは、つまるところ、私たちの生活の全体である。とすれば、個物も孤立して、独立して存在するのではなく、生活全体の中で、成立して行くものである。このようにして、この観点からは、個物の独立性が否定される。一方、観察の理論的負荷性<sup>1)</sup>ということが言われる。他のものから独立、孤立した、万人に共通な、いわば中立的

な観察というものはない、観察は、その人が懐いているその対象についての理論によって、いろいろに決まるといっているのである。これまで、観察の中立性を前提として、同じものは同じに見える、したがって同じものだとされていたのが、そうは言えないといっているのである。理論もつまるところは概念のネットワーク、私たちの生活全体のことである。個物は、文脈、理論と相対的に、私たちの生活の中で決まる。とすると、個物も、もともとあって、固有の存在性をもつものではなく、作られたものであることになる。個物の実在性の根拠、個物の成立の根拠は、個物は後から出てきたのではない、作られたものではないとするところにあった。それが、個物の独立性、自立性であった。そこが否定されることになる。このようにして、個物の孤立性、その裏にある実在性という個物に伴う先立つものが消えれば、ことからは、実在性まで辿らずに、そこにただ、あるがままに、あるだけとなる。これはアポストリオリズムということである。

アポストリオリズムに立てば、普遍について、普遍は作られたものであるとなつて、そこにアプリオリズムとともにあった存在性は消える。しかし、普遍がないというのではない。第I章で、私たちの生活している世界で、普遍は、その構成要素であった。ここでいうのは、実在として、根拠付けられたものとしての存在性は否定されるということである。さらに個物の独立性の否定と共に、個物の実在性も否定された。個物もある経過をともなつた、作られたものとなつた。アポストリオリズムに従えば、普遍も、個物も、存在性をもたない、作られたものである。しかし、私たちの生活の中に、というよりも、生活そのものとして、両者とも、確かに存在している。それが、出発点を、私たちの生活している世界に置いたということである。そこでは、存在や、根拠が問題ではない、私たちの生活がいわば最終の根拠なのである。

このような意味で、つまり、生活している世界を思考の出発点にするという意味で、あるこ

とは確かにあるが、実在としてではなく、作られたものとしてある、こうしたあり方を、「仮設」ということにする。普遍は仮設であり、個物も仮設である。したがって、この世界は仮設の世界である。

ここで、仮設とは次の特色をもつ。

- ① それ自体が出発点で、その外に、例えば、実在性というような、それを根拠付けようとする、先立つものをおかない。
- ② それ自体で存在するものではなく、作られたものである。

仮設は作られたものである。しかし、現実には勝手に作られるのではない。任意ではない。現実には、ゼロから作られるものではないからである。比喩的に言えば、無からの創造ではない。実際には、私たちは、ゼロから作るのではなく、すでにそこにある仮設を受け入れるのである。私たちは、すでに存在している仮設の中に生まれ、その中で生活していく。生活していく以上、何らかの仮設を受け入れざるを得ない。そういうことである。これを仮設に「コミット (commit) する」とよぶことにする。そして、大切なことは、コミットした仮設も、仮設であるから作られたものではあるが、いったんコミットした後では、私たちはそれに従って生きざるを得ないから、私たちの生活の中では、それは例えば実在と同様な強い拘束力を持つことである。これを、仮設は (いわば実在と同じ拘束力をもって) 「与えられている」とよぶことにする。

私たちの生活しているこの世界は、外なるものによって根拠付けられるのではない、作られた、仮設の世界である。しかし、任意に作り出されるのではない。現実の生活の中で、私たちはすでにある仮設にコミットして、私たちの生活を始める。その意味で、世界は私たちにとっては 与えられている世界である。世界が仮設であること、作られたものであることによって、先立つ、外なる、実在性 (客観性といってもよい) は落ちる。一方、与えられたものであることによって、世界の任意性、自由性、それに伴う、

いわば、私たちの内なる主観性が落ちる。旧来、哲学は、客観性と主観性、実在と観念、必然と自由というような観念を連立させるところから来るアポリアに汲々としてきた。これは、以上の説明からすれば、アプリオリズムからくるアポリアであって、アポストリオリズムに立つことによって、問題としては消える。生活的に言えば、内と外の2つの執着から自由になるのである。

とは言っても、この世界が、「仮設、作られたものであること」と、「与えられたものであること」、内容的に言えば、「仮設性」と「実在性」はやはり、矛盾しないだろうか。そのために、ここで、「閉じた世界」と「開かれた世界」という、もうひとつの区別をとり入れたい。開かれた世界では、仮設性と実在性は矛盾なく理解できる。世界を閉じてとらえると矛盾してくるのである。

世界を閉じたものと考えるときは、世界のすべてを知ることが出来る、世界のすべてが完全に与えられている、とすることである。現実には、そのようになっていないとしても、そういったことを想定して、そのようなものと思って生活することである。知の立場、知識、学問は、本来、世界を閉じたものとしようとするものである。知ろうとすることは、世界をその中に閉じ込めようという営為である。知が求めるのは、対象の完全なリストと整合性である。その中ですべてが説明される世界である。知のもとの、世界は閉じたものとなる。一方、世界を実在、客観とするのも、世界を閉じて考えた結果である。そこはすべてが実現している、完結した世界であり、したがって、私たちはその外に歩み出ることができない。完結した世界には、外はないのである。

世界を開かれたものとして考えるとは、この世界は、本質的に、理解できないものであるとする、そして、この世界は完結したものではない、不完全なものであるとすることである。生き方の問題としては、分からないことがあっても差し支えないとし、不十分と自覚して行動し、

ことがらはすべて、本質的に未完成であると承知することである。実際に、私たちの現実の生活は、分からないことがらのなかで、不完全なまま、行われている。分明と完全性は幻想である。このような不分明と不完全の中で、私たちの生活は、何の基準も与えられていないから、全くの白紙、何でもありうる、そういうものになる。そこを、開かれているとよぶことにする。しかし、そうかと言って、開かれた世界のもので、世界は虚無ではない。なぜなら、現実には、私たちの生活は、ここにあるからである。このことは次の図2で説明したい。

図でBは、私たちの生活している世界である。このBはAという開かれた世界の中に浮んでいる。開かれた、つまり、何でもありうる自由な世界の中に浮ぶBだから、Bは、四角でも、三角でも、もっと大きなマルでもありえた。しかし、今は、とりあえず、Bである。これが私たちの世界の仮設性である。一方、私たちの世界は、Bとして、ここに現にマルとして、存在している。それ故、存在する世界、与えられている世界でもある。なぜなら、このマルがなかったら、Aはただ開かれているというだけの、何もない場所だから、BがなければAも何もなくなくなってしまうのである。いわば、Bは外に向かつては仮設性、内に向かつては存在性をもつ。このように考えれば、私たちの生活している世界の、仮設性と存在性は矛盾しない。

Aを閉じてしまうと、Bはある限定のもとにおかれることになる。少なくともAを出ることはできない。Bの本質的意味での任意性、仮設性が成立しなくなるのである。そこでは、Bも

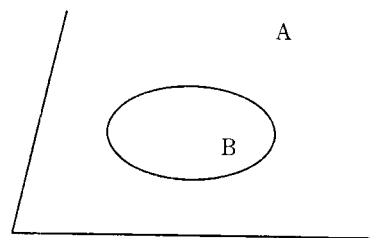


図2



Aも強い限定性、存在性に通ずるものをもつ。そこには、仮設性は成立しない。それでも敢えて、存在性と仮設性、(ある場合は有限性と無限性)を両立させようとする、神秘主義(矛盾を恐れず、矛盾をも理解できるとする立場)にならざるを得ない。私たちは、神秘主義に陥ることなく(つまり通常の論理を用いて)、「仮設性」と「与えられてあるという存在性」を両立させたいのである。それが、開かれた世界の中に、私たちの生活している世界を考えようという工夫である。

さて、このように、世界を開かれたものと考えることにより、私たちの生活している世界は私たちにあってより親しいものになってくる。このBという世界は、開かれた世界のもとにおかれて仮設である故に、一回限りの、この私のものになるからである。Aが閉じられていると、Bは固定化され、私たちの作ったものではないそれ自体による存在性をもつから、別な原理によって成立した、私たちとは別の、私たちの外にある、よそよそしいものになる。一方、世界が開かれたものであることは、それは私たちが過度にこだわらないうい世界であることでもある。Bは、開かれたAの中の世界として、それ故に、作られたもの、仮設であるから、それだけのものであって、それ以上のものではないからである。また、原理的には、他にいろいろな可能性があって、そのひとつであるに過ぎない。こだわりは、外なるもの、私たちとは独立に存在するものに対して、何らかの関係を無理に持たなければならないところに、成立するのである。このようにして世界を開かれたものと考えることによって、ことごらへの執着からより自由になり、現今の生活への親密さが増すのである。

私たちにあって大切なのは、理論でも、世界の理解でもなく、あくまでもこの世界における私たちの生活である。そして、私たちの生活とは、開かれた世界の中の、とりあえず閉じられたBという世界である。開かれた世界の中に、私たちの生活という、それぞれ閉じられた世界

をどう作り上げていくか、これが私たちの生活という日々の営みなのである。それは、具体的には、仮設と実在の、開かれていることと閉じられていることの、あるバランスである。

これまでの哲学は多く、世界を閉じて見る試みであったかも知れない。そして、色々なやり方で閉じてしまった上で、しかし、やはり、認識とか、自由とか、決断、生死などに伴って、開かれた世界という視点は、私たちの生活の中で捨てる訳にはいかないものだから、閉じた世界の中で、この開かれた世界を説明しなければならないという、アポリアが生じるのである。これは図に関連して言えば、Aという開かれた世界を、Bの中で理解しなければならない、Bという閉じた世界の中に、折り返して包み込まなければならない、そこでの困難である。開かれたAから出発しておけば、矛盾なく、何でもなく、Bを認めることができる。開いた世界を考えておけば、中で閉じることは可能なのである。

ただ、ここで、誤解されていけないのは、Aの世界には、あくまでも、自立性がないことである。Aをアプリアリズムに基づいて理解してはいけない。ややもすると、事前に存在する、根源的なAの世界というのを考え、そこから話を始めたりする。Aの世界は開かれているというだけで、もともとあったわけではない。Bの世界の成立によって初めてそこに現われるものである。Aの世界に実体性を認めてしまうと、AとBの2つの世界があることになり、別な意味で、アポリアが生ずる。Bの世界の成立の前に、それと別な、内容は規定されていない故に、全体的な、神秘的な、すべてを包み込んだような、特別な世界を考える、これはAという世界を閉じてしまうことなのである。閉じてしまうとAの役割がなくなる。いわば、Aは、文字通りに混沌であり、混沌という確実な世界があるというのではない。

このようにして、世界を開いたものとするか、閉じたものとするかは、哲学のあり方を決める根本にある問題である。そして、思いつくまま

言えば、Nietzscheの「ニヒリズム」、それを受けてのWeberの「責任倫理」、Deweyの「探求」、Popperの「反証可能性」、Wittgensteinの「言語ゲーム、生活形式」、仏教でいう「無常」などなど、これらは、開かれた世界を志向するものであった。

以上、まとめておけば、この小論で述べようとしたのは、次の3つの論点である。

- ① 哲学は、私たちが現に生活している世界を基盤に成立し、そこに戻るべきものである。
- ② 私たちの生活している世界は、目に見えるものと見えないものの混合である。どちらか一方に他を還元しようという試みはミスリーディングである。
- ③ 開かれた世界では、「仮設性」と「与えられていること」が矛盾なく成立する。

最後に、もうひとこと言えば、第I章の目に見えるもの、見えないものの混合、そこにおける階層性は、A.Korzybski, S.I.Hayakawaの一般

意味論<sup>2)</sup>に由来するものである。一般意味論はこれまでアカデミズムの外の通俗な理論として扱われてきたが、私自身は、一般意味論は、極めて根本的な、哲学の問題へのよくできた解答であると思う。また、第II章の開かれた世界の視点は、根本的には大乘仏教の空観を別な言い方で述べたものである。空観は通常の論理（古典述語論理）を離れ、矛盾を肯定するような特殊な論理を展開しているなどと、誤解されて説明されたりするが、私は、空観は通常の論理で十分理解でき、またそうすべきものと考えてきた。さらに、一般意味論と空観では、きわめて離れた、無関係な領域のように思われるかもしれないが、私の中では、長い間、いつか結びつくであろうものとして、共に親しんできたものである。

次の課題は、この観点のもとに、倫理学と宗教の問題を扱うことである。もとより、私たちの生活している、この世界の問題としてである。

#### 注

- 1) theory ladenness, N. R. Hanson, *Patterns of Discovery*, 1971 (村上陽一郎訳『科学的発見はいかにしてなされたか』講談社) 参照。
- 2) general semantics, A. Korzybski, *Science and Sanity — An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics*, Lancaster,

Science Press Company 1933, S. I. Hayakawa, *Language in Thought and Action*, fourth edition, 1978. (大久保通利訳『思考と行動における言語』岩波書店)を参照。なお、一般意味論でいう、Non-Aristotelian Systemは、まさに、開かれた世界に通ずるものである。